

足の音をはさがるよしもあらくに踏みさびし
めり夜の濤りみち
おのづから夜は淋しき塀のかけ少年はうたをう
たひ行けるも
少年の唱歌遠ぞきあとのやみ塀ながながと夜は
ふけしづむ
鳴るものに汽笛遠寺の鐘の聲よるはひとしほ深
からんとす

せんせい

賛助員 岩田 ふみ

せんせいと呼ぶるゝ事のうれしさに馴れきてあ
はれ幾とせかへし
せんせいと呼ぶるゝ事のうれしさも馴るれば何
かもぞたらはぬ
カシミヤの袴のすそうすら褪め吾がさびしさぞ
こゝにつごへる
不公平はせじと思へごかくに撫でてやりた
き生徒の一人あり
さとされて泣きいづる生徒とさとさねばならぬ
この身といづらかなしき

白き衣まれば吾が身も淳しげになやみのかげの
ありとしもなき

朝曇り

賛助員 安永みち子

朝曇りの空のしめりにたかだかと白き月こそか
ゝりてゐたれ
朝月の白きが高くかゝりぬる櫻芽ふきぬひとよ
のひまに
朝の月あをみてゆくと思ひけり櫻の芽おきあを
き木うれに
はつとして朝の月を仰ぎみる心に高き櫻なりけ
り
たけたかき櫻芽ふきぬほのあをき梢に朝の月あ
りにけり
死にしやうに龜はからだをかたぶけてねむりて
ぞをるよあけの池に
しらじらとあくれば池のものかげの龜のせなか
の匂ふさあをに

生徒をさとす言葉ひしひし身にあたり逐はるゝ
如く出でし教室

黒板のぬりかへられし快さいはでものこと教へ
けるかな
後毛をつとかきあぐる教ふべき事忘れたるもの
わびしさに
天才のいく人が出でん心地してしきりに生徒ら
のかはゆき日かな
あまりにも慕ひよる生徒の一人ゆる教師が得た
るうき名さびしも

△ △ △

蚊がなければ夕べとなればいやまして夏のあはれ
の身にせまるかな
蛙なく夜ごと夜ごとを母と居り涙わりなき日の
つづきけり
雨はれし夕べの窓のそよ風にほのぼのとときく遠
蛙かも
夕されば日静やかにてりいでて木の影ながき家
にわがすむ

ふかぶかと龜はねむりあさあけの光しづかにさ
し入る池に
目しひたる小鳥かくれてあるらむか光とごかぬ
あを葉のしげり
桐のかげうごかぬ土をはふ蟻のあはたゝしもよ
小さき蟻の
芍薬の葉かげに白き蟻のゐてねむれるらしもゆ
ふべもしらす
匂やかに杉菜のびたりやわ土の土手の赤土に杉
菜のびたり
赤土に杉菜すいすいのびてゐたり手もふりがた
し杉菜すいすい
赤土のしめらぬほごに雨はふり杉菜の瑞葉ふし
らみにけり
涙をばためたる様と思ひけり土手の杉菜の雨に
濡れつゝ
赤土の土手の杉菜にかくすべき物思ひならずい
ざみにゆかな

□

□

□